

第 2 章

商人と両替・ お金持ちへの道



描かれた

江戸の商人

販促ツールと商いの秘訣

商人と両替

江戸時代の江戸・大坂・京といった大都市や、城下町・宿場町などの人の多く集まる場所には両替屋が多く存在しました。両替屋は、宿屋などそれ以外の商売を兼ねることもありました。



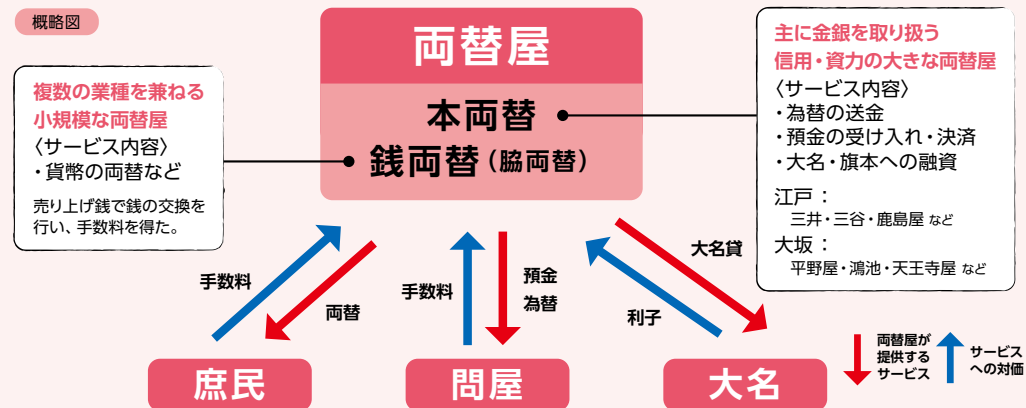
900520

「銭小うり」看板のある両替屋

初代歌川広重「順慶町夜見世之圖」『浪花名所図会』

順慶町（現・大阪市中央区）の夜店には、衣服、道具、瀬戸物、仏具などの商品が並び、多くの人で賑わっていた。その様子は、「凡十町許の間両側尺地の透間もなく夕ぐれより店をつらね万灯をてらし万のくさぐさを飾りて商ふ」（『摂津名所図会大成』）と記された。

店の立ち並び風景の左奥に、「銭小うり」の看板が見える。人々の往来が多い町には、小銭への両替を行う商人がいた。



描かれた両替屋

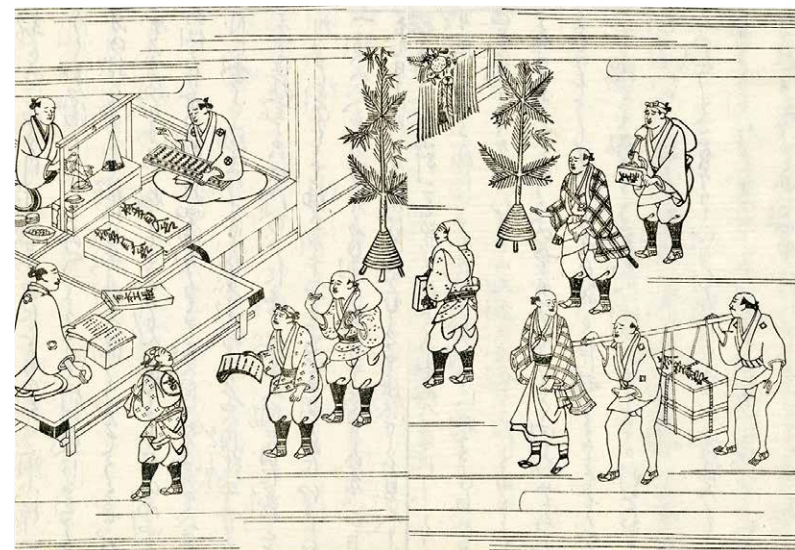


900501

風刺画に描かれた両替屋

秋人小丸「銅銭争い図」

両替屋の店内では、中央の番頭と右端の小僧が、江戸時代末期の銭相場の混乱に困って嘆いている。



『世間胸算用』 905202

銀貨のうち秤量銀貨である丁銀・豆板銀は、天秤と分銅を用いて計量した。両替屋で用いられる天秤と分銅は常に正確さが求められた。

左側に両替屋、右側には大晦日の掛け取りを振手形で支払うために両替屋へ銀貨を預け入れる商人の様子が描かれている。



『新篇塵劫記大全』 903632



『人倫訓蒙図彙』4 NDL蔵

「銅銭争い図」の両替屋のセリフは…

困っている両替屋の番頭と小僧の周りでは、銭貨たちが看板の下に書かれた相場に対して、口々に文句を言いながら騒いでいる。右奥の部屋にいる金銀貨たちは、その様子を腕組みをしながらみている。

（文久永宝）
近頃新出来のおいらたちおとすぐにけちをつけられて…あんまりひどく上げたり下げたりも、ていげえ（大概）にするがいい…
ぜんていあそこ下がつている書き付けが気に入らねへ

（番頭）
これはどうしたわけだ

分銅型の看板の下に書かれた相場には、金一両が銭十貫八百文とあり、銭貨に対して金銀が高値になっている

（一分金）
今迄はごろつきなんぞには口に含まれ、その上にふんじへくるまれ、ようようあの手を離れてますますありがてへ

（二分金）
こっ高値のいこう遣恨は恐ろしかろう



（天保当百銭）
…此節、金銀があんまり増長しやあがる…

（天保当百銭）
ぜんてい、あの看板が気に入らねえハ

（鉄四文銭）
こっちなんぞは…働くとうんざりされた顔をされて、おまけに馬鹿だのそっくりだのと好きなことを言われ…

秋人小丸 筆
（商人困る）
（小僧）
番頭さん
このように銭相場が「た」こたしやアわたしらにはもうさっぱりわからぬから困ります

看板のかたち—分銅—

両替屋の看板に多くみられる分銅のかたちは、中央にくびれをもつ分銅をかたどっている。分銅は、重さごとに50両から1分に至る19種類が使われた。分銅は、秤とともに正確さを求められ、大判座後藤家が製造、市中の分銅への検印まで一手に担った。



961046



959230～959248



682



686



2671

量って使う銀貨 丁銀・豆板銀・包銀

江戸幕府は、1601年に慶長丁銀・豆板銀を発行し、その後も重さ（単位：匁）によって価値をはかる秤量銀貨を発行した。18世紀後半より、幕府は秤量銀貨を回収し、もともと金貨の単位であった両建ての計数銀貨を発行するようになったこともあり、幕末には匁建ての秤量銀貨は殆ど流通しなくなった。



分銅形 961045、寛永通宝形 961038

遠目でもわかる 両替屋の看板

分銅と寛永通宝の形をした両替屋の看板。両替屋の店頭には、分銅や銭の形をした看板や、長方形の板に「金銀両替」などの文字や屋号を記した看板が掲げられた。



959001

正確な計量が信用をつくる 天秤

重さを量って使う丁銀・豆板銀の両替や、それらを包銀にする際、両替屋は天秤と分銅で計量した。

台のなかに、針口（秤・皿）・鳥居・小槌が収納できる。

お金持ちへの道

江戸時代、商人として成功したお金持ちは、出版物などを通して人々に知られる存在となっていました。
呉服屋の双六や長者番付などから、人々のお金持ちへの興味がうかがわれます。

(上段)2段目 左側より



岩城升屋

麹町五丁目



松坂屋

新橋芝口一丁目



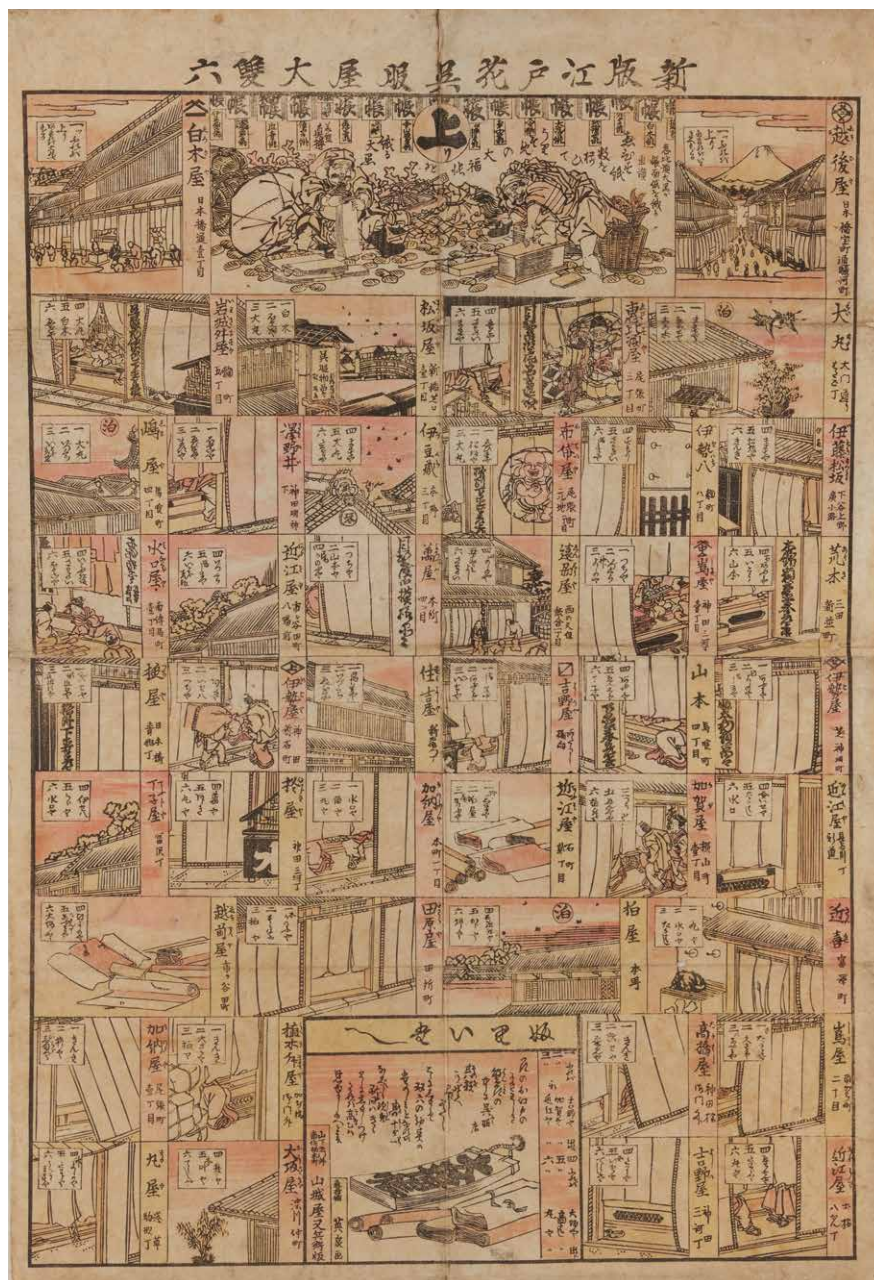
恵比須屋

尾張町三丁目



大丸

大門通はたご町



901230

双六で巡る江戸の呉服屋

溪斎英泉「新版江戸花呉服屋大雙六」

江戸時代後期の42の呉服屋を題材に描かれた双六。
上段には、「白木屋」「越後屋」「大丸」など、長者番付に掲載のある店名が描かれている。

(上段)1段目 左側より



白木屋

日本橋通一丁目



越後屋

日本橋室町通駿河町

新版江戸花呉服屋大雙六					
白木屋 日本橋通一丁目	上り				越後屋 日本橋室町通駿河町
岩城升屋 麹町五丁目	松坂屋 新橋芝口一丁目	恵比須屋 尾張町三丁目	大丸 大門通はたご町		
島屋 馬喰町四丁目	澤野井 神田明神下	伊豆蔵 本郷三丁目	布袋屋 尾張町元地一丁目	伊勢八 麹町八丁目	伊藤松坂 下谷上野広小路
水口屋 南伝馬町一丁目	近江屋 市ヶ谷田町八幡前	万屋 本所四ツ目	遠州屋 西の久保飯倉一丁目	島屋 神田三河一丁目	荒木 三田新並町
槌屋 日本橋青物丁	伊勢屋 神田新石町	住吉屋 新右衛門丁	吉野屋 あたらし橋向	山本 馬喰町四丁目	伊勢屋 芝神明町
丁子屋 富沢丁	柊屋 神田三河丁	加納屋 本町一丁目	近江屋 石町二丁目	加賀屋 横山町一丁目	近江屋 長谷川丁邪道
越前屋 市ヶ谷田町	田原屋 田所町	柏屋 本町	近喜 富澤町		
加納屋 尾張町一丁目	植木升屋 加ち橋御門外	ふりだし		高橋屋 神田橋御門外	島屋 南から町二丁目
丸屋 浅草駒形丁	大坂屋 深川仲町			吉野屋 神田三河丁	近江屋 土橋八かん丁

日本橋周辺の主な呉服屋

日本橋周辺には、越後屋・白木屋のほか、中小規模の呉服屋が多かった。
また、呉服屋は神田や京橋・銀座方面にも数多く存在した。



日本一のお金持ちは誰だ？



900675

町人の長者になる夢 出世双六

歌川芳藤「長者出世双六」

商人や医者・儒者など町人の出世の過程を描いた双六。この双六では、商人は「手代奉公」から「大問屋」を経て「長者」になっていく。「隠居」は、長者から隠居料を取ることが記されている。山積みのお金さが描かれた「銭屋」、天秤が描かれた「両替」なども見られる。最下段には家屋敷を抵当とする借金「家質」が包金や小判などと描かれている。

絵双六の種類

- サイコロの目の数だけ進む「廻り双六」
- サイコロの目の数の指定のコマに移動する「飛び双六」
- ①②の特徴を兼ねた「飛び廻り双六」
- ふりだしでコマの進む経路が男女や善悪などで別に分ける「振分け双六」

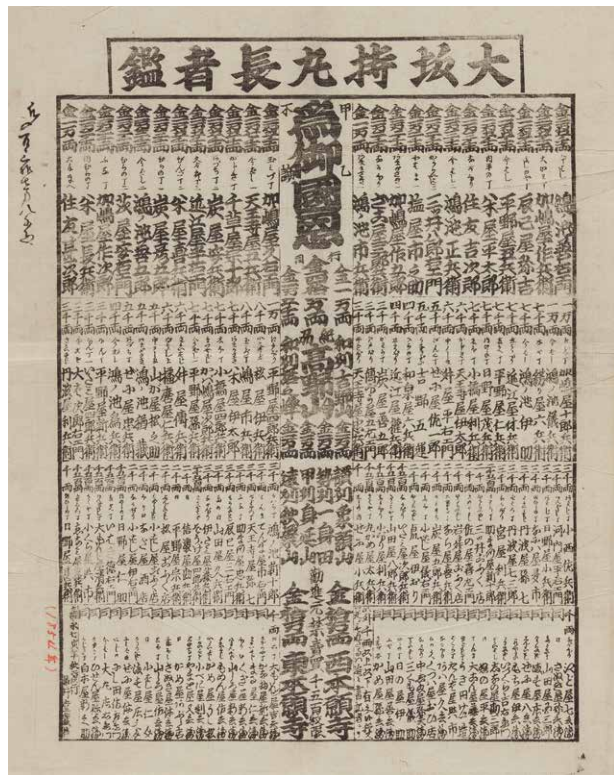
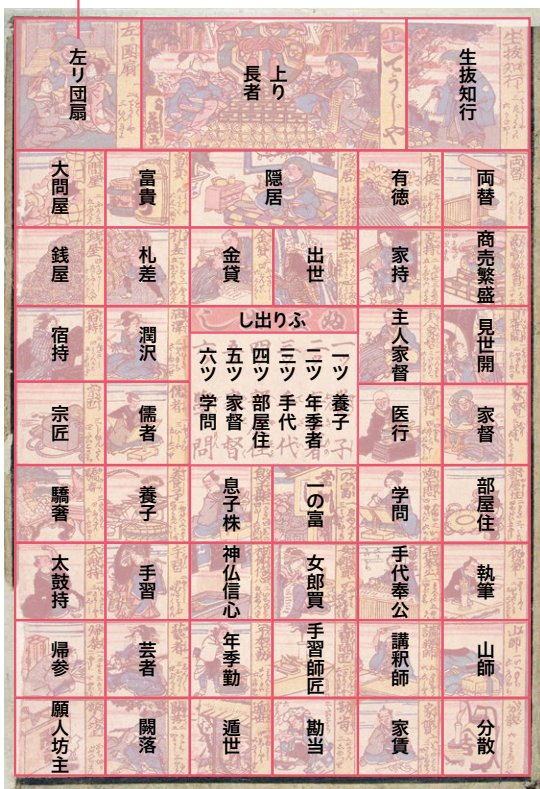
絵双六は、浄土双六（仏教の教えなどのテーマ）から始まり、道徳や教訓を伝える要素があった。江戸時代には、出版文化の広まりとともに様々な絵双六が生まれ、正月の遊びとして定着していった。

長者出世双六のマス名

この双六は「飛び双六」。各マスに書かれた、サイコロの目の数に対応したマス（「左り団扇」の場合、一、二、三の目）に従って移動する。指定されているサイコロの目がでるまで、同じマスに留まる。



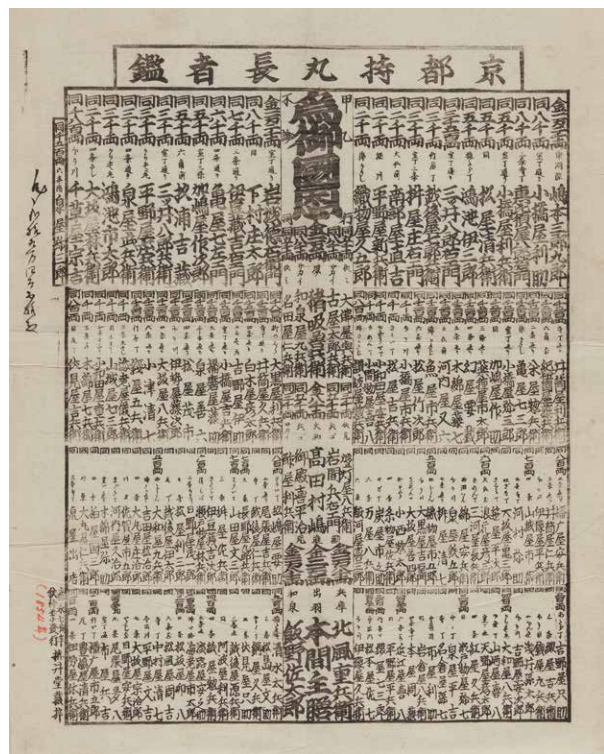
- 「左り団扇」
- 一 うとく（有徳）
- 二 てうしや（長者）
- 三 いんきよ（隠居）



911987

大坂持丸長者鑑

1854年



911988

京都持丸長者鑑

1854年

江戸の長者番付

相撲の番付表のように、様々なものに序列をつけた「見立番付」
「見立て」とよばれる一覧表が、江戸から明治時代にかけて流行した。

日本橋周辺の豪商

1878年 郡区町村編制法による
「日本橋区」の範囲

番付のトップ

江戸：両替屋 三谷、下り酒問屋 鹿嶋
※両替屋はいずれも大名貸で財をなした。

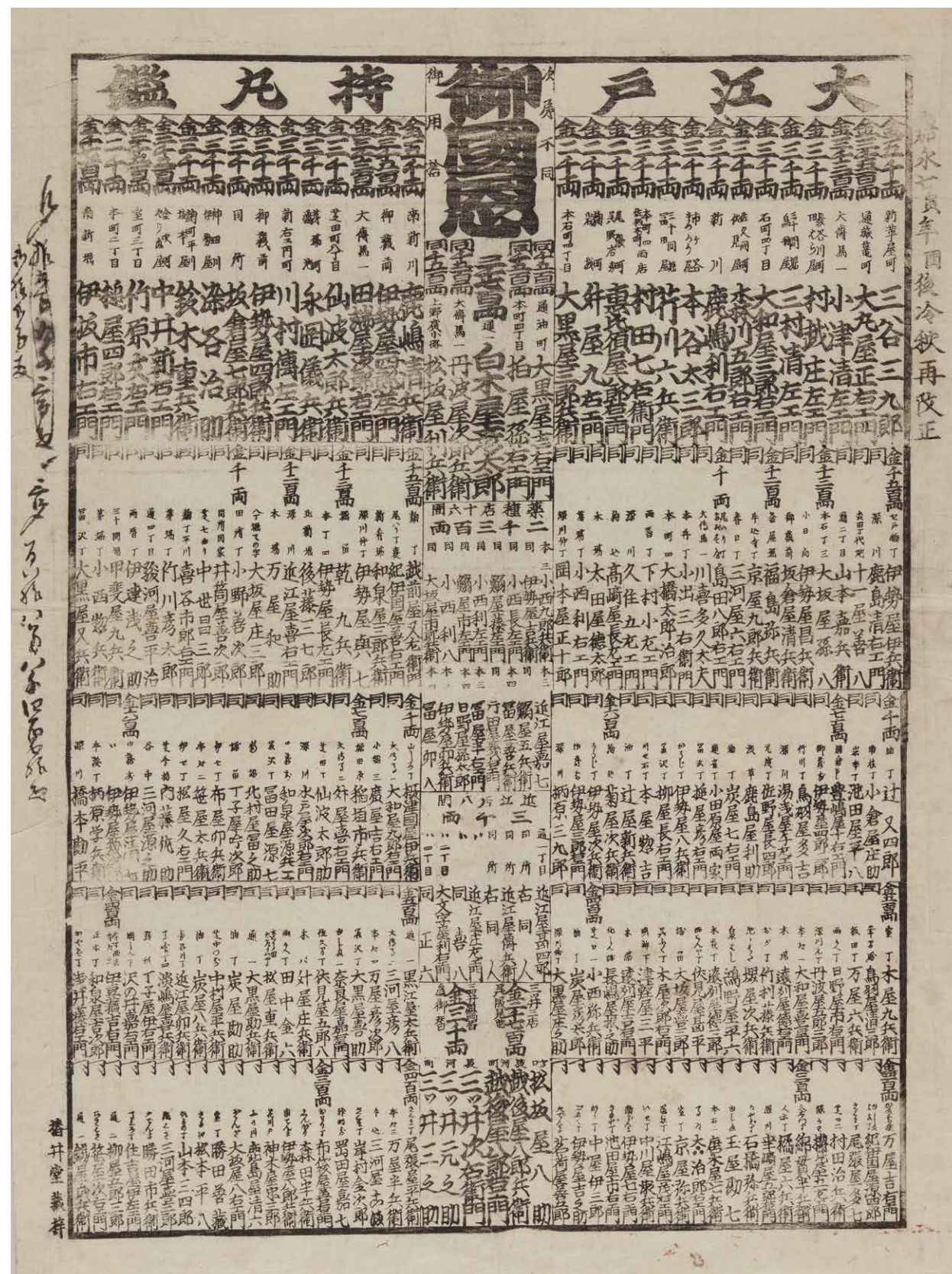
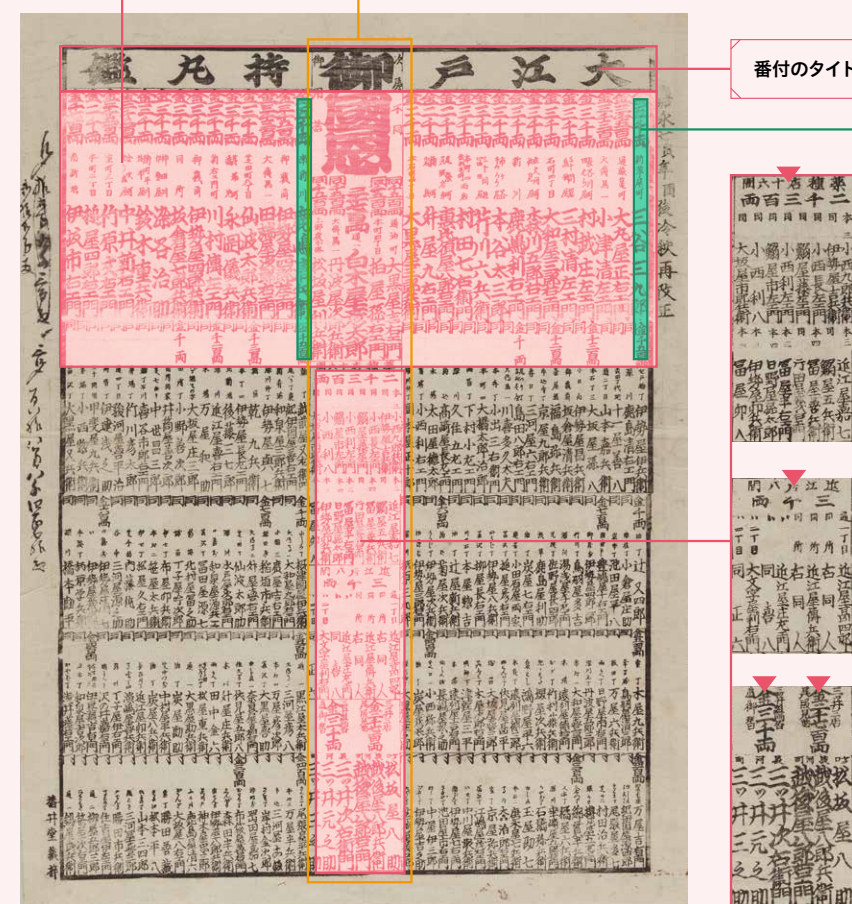


この番付の中軸には、
誰もが認める豪商が並び

番付のタイトル

東/西それぞれ
右上から格付け

中央には日本橋の本店、
・本町に軒を連ねていた
数々の薬問屋
・通町の量表問屋(近江屋)
・駿河町の三井呉服屋
(越後屋)、両替屋
が挙げられている。



911986

大江戸持丸鑑

1854年



912014

役者の人気ランキング 諸商人見立評判記

「當ル午の顔見世 諸商人見立評判記」

当時の歌舞伎役者を商人に見立てランク付けした刷物。

《見立ての例》

- ① 高嶋屋市川小団次 が 米問屋「高嶋屋米舂」に（「大極上上千両」）
- ② 大和屋岩井糸三郎 が 絵草子屋「大和屋燕子」に（「大上上吉九百五十両」）



900515

長者たちの対決 東京家宝力競

守川周重「東京家宝力競」明治時代

番付に登場する呉服屋などの長者たちが「首引き」遊びをしている様子。

池田屋 対 伊勢吉	高崎 対 木場鹿嶋	えひすや 対 田端屋
鹿嶋 対 鴻磯	中条 対 竹原	小津 対 柏屋
大六 対 丁吟	井善 対 三ツ井	田庄 対 石町大三
三谷 対 仙波	よしや 対 キイ	

色々な見立番付

全国の名産品や地域の料理屋などのランキングが「見立番付」として数多く出され、当時の人気のある製品や店が人々の間で知られていたことがわかる。

「大日本産物相撲」
911848

